

あたしはまだここにいる

木口まこと

カーテンの隙間から差し込む陽射しが眩しくて目を覚ました。あたしは枕元に置いたはずのスマートフォンを右手で探り当てた。もうじき七時半だった。

ベッドに体を起こし、両手を上に大きく伸ばしてあくびをした。「ふああ」と少し間の抜けた声が出たのを覚えている。いつもと変わらない朝。

「おはよう」と裕一に声をかけた。それから「誕生日おめでとう」と言い添えるのを忘れなかった。裕一の三十九回目の誕生日がいい天気でよかった。

二〇四四年九月二十日。今日からこの記録を書く。誰にも読まれない可能性が高いのはわかっている。でも、何かを書き残さなくちゃならない気がしてる。あたしだけじゃなく、世界中のみんな

なが自分の体験を書けばいい。だって、万にひとつ、誰かの目に触れないとも限らないから。その誰かが何ものなのか、想像もつかないけど。

あたし、わたし、わたし、私、いつそ僕。一人称は難しい。あたしと書いたらどういう女を想像するだろう。こんにちは、それともこんばんは。あたしは遥と書いて「はるか」。木崎遥。これを書いたる今は生まれて四十二年め。いつまで書き続けられるかはわからない。でも、書けるかぎり書き続けようと思う。

この文章はあたしからあなたに宛てた手紙、それとも物語。中学の頃、あたしは文学少女で、いつか物語を書く人になりたかった。今はある意味で物語を読み解く仕事をしてるけど、書いてはいない。なんだか久しぶりにあの頃に戻った気分だ。このノートは書棚にささってるのを見つけたんだけど、なんのために買ったんだったか、もう思い出せない。手書きだなんて、昔の文豪っぽい。

あなたが今この瞬間にこれを読んでもしたら、その今はいったいいつなんだろう。その時、地球の環境はどうなってるだろう。生命は存在してるだろうか。生命はたくましいから、気候変

動も生き抜くんじやないかな。地球はあたしが知らない生きものであふれてるかもしれないね。彼らに会ったら、あたしから「愛してる」って伝えてほしい。

ベッドの横にバスケットが置いてあつて、ひと抱えほどある西瓜の種みたいな物体が鎮座してる。いちばん長いところが七十二センチで、胴のいちばん太いところの幅は五十三センチ。ちゃんと測つたんだ。色は濃い茶色で、ほとんど黒に近い。裕一が好きだったブーツの色に似てる。

表面はざらざらしてて、木の皮みたいに硬い。叩けば鈍い音がするのを知ってるけど、あたしは叩かない。ていうか、叩けない。表面に手のひらを当てると、なじみ深いひんやりした感触が伝わる。

今朝もそうしてたら、ちょっと何かがこみあげてきた。パジャマのまま、トーストと目玉焼きとコーヒーで朝食をすませて、真っ赤なTシャツとジーンズに着替えてからコーヒーをもう一杯飲んだ。薄いメイクをしたけど、肩までの髪は無造作にゴムでまとめただけで、出がけに玄関の鏡を見たら、あんまりいけない気がした。

「行ってきます」玄関を出るとき、大きめの声で言った。

自転車置き場から自転車を出して、空を見上げた。今日も暑くなりそうだった。

研究所に着くなり、汗を拭く暇も与えてくれずに由香が声をかけてきた。ロビーであたしを待ってたらしい。青いTシャツにショートヘアがよく似合ってた。

七つ歳下の由香はあたしより十センチくらい背が低い。ていうより、一七〇センチあるあたしが由香より十センチくらい高い。だから、ふたりで並んで鏡に映ると姉妹みたいに見える。じつさい、あたしは由香のことを妹みたいに思ってるけど、ほんとうはあたしより全然しつかりしてる。研究だつてばりばりにできる。京大の博士課程在学中にウイルスの数理モデルで大きな仕事をして、二年で博士号を取った。サンタバーバラのエリザベス・チョウ教授のもとでポストドクを六年やって、三年前にうちに来た期待の星だ。

「どうしたの？」あたしは尋ねた。

「早くフォーラムを見て。分子が見つかったつて」由香が興奮を抑えられない様子で言った。「見つかった？」たぶん、あたしも大声を出してしまったと思う。

「フォーラムを見て」由香が繰り返した。「ヒドロキシトリプトファンに似た物質が分泌されているのがわかったって、パリのグループが。フォーラムは大騒ぎよ」

「セロトニンの前駆体？」

「に飾りがついてる。ただし、D体なの」と由香が答えた。

単純な分子だろうと思つてたら、セロトニンの前駆体か。そう考えながら由香のあとを追つてラボに急いだ。光学異性体は予想してなかった。でも、今さらそれくらいでは驚かない。転換酵素はあるんだし、何があつてもおかしくないから。

生物学のラボつていうと実験テーブルが並んでると思われがちだけど、あたしたちのラボにはパーティションで区切られたデスクが並んで、各自のデスクに大きなディスプレイが取り付けられてるだけだ。ドライのグループだから。ドライつていうのは情報と数学。シミュレーションと人工知能とデータベースの世界だ。

ラボでは激論の真つ最中だった。いつもにぎやかな萌絵とタンサニーだけじゃなく、普段はもの静かな拓也も身振りをまじえて熱弁をふるつた。あたしたちふたりを合わせて、これが今の

うちのチーム全員。拓也はチームで最後の男だ。部屋に入ると、三人がいつせいにこつちを見て、口ぐちにとにかくフォーラムを見ろって言った。

「フォーラム」と声をかけると、デスクのディスプレイが明るくなった。みんながあたしの席のまわりに集まってきた。最近のポストをネットワーク表示にさせて、そのハブになってるノードを見つけて指差した。「これ？」と誰にもなく聞いて、返事を待つ前にそれをタップした。

カメラに向かって話す女性の映像が出た。顔に見覚えはなかったけど、フォーラムでときどき見かける名前だった。字幕が表示されるのをざっと追ったら、発見の事情が分かった。被験者の脳波にシグナルが現れてから三十分後に採血して、微量分析にかけたらしい。とにかく待ち続けるだけの研究だ。地道な分析しかないんだなって改めて思った。

議論のツリーを追おうとしたときに、アラートがついた。副所長の林田さんから、三時にこの件についてみんなにレクチャーしてほしいっていう依頼だった。

それからフォーラムの議論を夢中で追って、プレゼン資料をまとめて、なんとか三時に間に合わせた。講堂には残ってるメンバー全員が集まった。講堂を見渡して、こんなに減ってしまったんだなって今さらながら驚いた。男の研究者は拓也を入れて四人きりだった。

あたしはセロトニン前駆体類似物質発見の経緯とその構造、そしてその意味を周辺情報をまじえて一時間弱話した。

「脳で作られて、そのまま血中に運び出されているようです。脳は調べようがないから、運び出されるメカニズムは不明」

「細胞での受容体は？」誰かが声を上げた。

「それを見つけるのがこれからの仕事よ」あたしは答えた。

話を終えてロビーに出たら、おもてはいつもの夕方の雨だった。あたしはしばらくガラス越しに雨を眺めてた。

今夜はここまで。最初だからがんばって書きすぎたかな。こうやって、時々書いていくつもり。

研究所のことを書いておこう。あたしがいるのは理化学研究所が横浜市のはずれに作った小さな研究所で、分子生物学と細胞生物学のウェットのグループが合わせて四つにあとはあたしたちインフォマテイクスのグループが入ってる。ていうか、入ってた。過去形だ。ウェットっていうのは実験のこと。もともとはチームリーダーからポストドクまで合わせて四十人くらい研究者がいたのに、もう半分になってしまった。

本来なら生命の普遍性に焦点を当てた地味で基礎的な研究をやってるはずの研究所だけど、今はそんなことを言ってもらえない。世界中どこでもそうだ。理論から臨床まで、あらゆる研究者が駆り出されてる。生物学者だけじゃなく、数学者も物理学者も化学者も工学者も、今はとにかく何か手がかりを見つけるのに必死だ。

さつき所内専用のフォーラムを見たら、細胞生物学のチームは早速セロトニン前駆体類似物質の受容体を見つける作業にかかっているらしい。ヒトiPS細胞から分化させて作った培養細胞の培地に合成したセロトニン前駆体類似物質を入れて反応を見るつもりみたい。

オープンのようなフォーラムでも議論が沸騰してた。もちろん、うちの細胞生物チームと同じような実験が世界中で計画されている。あたしは実験のプロトコルについていくつか基本的な質問をポストした。メッセンジャーRNAの発現パターンがある程度出てきたら、それからがインフォマティクスの仕事だ。

ヒドロキシDトリプトファン修飾体はDハイドロトリポイドって呼ばれるようになった。フォーラムではDHTPoidって書く人が多い。

初めのうちは論文数を稼ぎたい研究者たちの愚にもつかないプレプリントがプレプリントサーバーを埋めつくしたのを思い出した。あれには頭がおかしくなりそうだった。だって、どれもこれも意味があるとは思えなかったもの。今はもう誰も悠長に論文なんか書いてない。研究の最前線はフォーラムにある。

真剣な研究者が世界中から集まって、毎日新しい発見やアイデアが報告され、たくさんのもとりがある。ボランティアのモデレーターが毎日のレジュメを作ってくれるから、忙しい時でも

それにさえ目を通してれば、とりあえず最先端についてはいける。科学の世界はこの数か月で大きく変わってしまった。いいとか悪いとかじゃなく、いやおうなしに。

今朝ラボに着いたら、由香が不安げな顔で駆け寄ってきた。

「スラジットから連絡がないの。きのうもおとといも」由香が言った。「遙には来てない？」

「由香に連絡がないのにわたしにあるわけないよ」ロッカーを開けながら答えた。この状況で連絡が途絶えるのはいい兆候じゃない。スラジットは男だから、なおさらだ。

「心配だね。心当たりはないの？」って由香に訊いた。

「分からないの。二日連絡が取れないだけなんだけど、でも二日も連絡がないなんて今までなかったから」

「あつちの研究所の人に訊いてごらんよ」とあたしは言った。

スラジットと最後に言葉を交わしたのはDハイドロトリポイドが発見された次の日、ちょうど一週間前のミーティングだった。インドの状況は日本とそんなに変わらない。データの上では世

界中どこも似たようなものだ。もう男性の七、八割がいなくなってしまった。女性はたぶんまだ二割くらい。

一時は世界中がパニックだった。国立感染症研究所がウイルスを作ったっていう噂が流れて、人々が押しかけたこともある。あたしたちの小さな研究所にさえ、プラカードを掲げて抗議に来る人たちがいた。そんなことをしたつてどうにもならないのに。無責任な噂が飛び交って、街は殺気立ってた。デモがあつたり、小さな暴動があつたり、国会では政府の責任を追及する質問が続いたりした。外国からはかなり激しい暴動のニュースがあつた。

でも、それも六月終わりくらいまでだった。それどころじゃないつて、みんなわかつたから。ていうか、いやもおうもなくわからされてしまった。研究所に押しかけてくるような人はもういない。駅前で大声を上げてるのは新興宗教の人たちだけで、誰も立ち止まって耳を傾けたりしない。

あたしたちはとにかくベストを尽くしてる。当面の目標はできた。Dハイドロトリポイドに対する細胞の応答を解析する。今できることをやるしかないんだ。

不安はある意味で当たってた。でも、幸運にもはずれてたって言うべきだろうな。今朝、スラジットから由香に連絡があった。キャンパスに入ろうとしたところで暴漢に襲われて、四日間意識がなかったらしい。バンガロールにあるスラジットの大学はこれまでも何度か襲撃を受けてたから、気をつけてたはずなのに。

「生きててよかった」由香がちよつと涙声になつてたから、抱きしめてあげた。

由香とスラジットはポストドク時代にチョウ教授のラボで出会った。それからふたりとも母国で研究職について、遠距離恋愛中だ。以前は頻繁に行き来してたけど、今は会うに会えない状況が続いてる。そんな中でもふたりは一緒になつて大きな研究成果を挙げてきた。あたしたちのチームがバンガロールの研究チームと共同研究してるのも、もとはといえばふたりの関係から始まつてる。

「今日はもう帰ったら？」由香を気づかつて林田さんが言った。

うちの体制はかなり大変なことになってる。所長がいない今は副所長の林田さんが全体を見てる。四つのウェットのチームにはそれぞれリーダーがいたのに、男性のリーダーふたりはもういない。とにかく分子生物学と細胞生物学のふたつに再編して、なんとか動かしてる。

ドライのチームはもともとあたしがリーダーだった。もうメンバーの半分を失ってしまった。裕一もいなくなつたひとりだ。それでもあたしたちは研究を続けてる。

「帰つてもしかたないから」って由香は言つて、その午後もコンピュータに向かつてた。ふたりの数理モデルだ。由香とスラジツトが作った数理モデル。

あたしはふたりがまた会えることを願つてる。飛行機がほとんど飛んでない今、インドはとんでもなく遠い。

三日前にああ書いたけど、今日になって事態は急変した。由香はあたしに抱きついてずっと泣いた。あたしには由香の気持ちかわかる。

スラジットは死んでない。種になって眠ってるだけだ。そう、そういう言いかたはできる。できるけど、それがなぐさめになるわけじゃない。スラジットにはもう会えない。ていうか、会ったって意味がない。意味がないと書いてみて、涙が出そうになった。意味はあると思いたいの、ほんとうは意味がないと知ってる自分が悲しかった。

あたしはただ悲しかった。悲しいあたしが泣いてる由香を抱きしめてた。どうしてこんなことになっちゃったんだろう。言ってもしかたないのはわかってるけど。

由香はうちにふた晩泊まった。だって誰かがついてないとつらすぎるから。

はじめは失踪事件だった。あとから振り返ると、十二月はじめにニュージールランドで起きたのが、記録されてる限り最初の失踪だ。日本でも一月五日まで記録をさかのぼれる。初めはゆっくり、そしてだんだん急激に増えてきて、それが世界中で続けざまに起きてるってわかるまでに二か月くらいかかった。

あれからまだ一年も経ってないなんて信じられないよ。もう何年も経ったような気がする。あまりにもいろんなことが起きた。研究所のみんなにも、町の人々にも。

政府は次々と閣僚が入れ替わって、今は閣僚の八割くらいが女性だ。首相がもともと女性だったのはせめてもの幸いだったのかもだ。官公庁は仕事を絞ってなんとか回してるんだと思う。

電気や水道なんかのインフラは自動だから今のところ維持されてる。自動運転の電車は本数を減らしてるけど、とにかく今はまだ動いてる。この状況でも、たくさんの人が仕事を続けてる。物流もまだなんとかなつて、スーパーマーケットも開いてる。

由香がショートでいられるのも、行きつけの美容院が営業を続けてくれるからだ。「髪を切ってもらってるときは落ち着く」って由香が言ってた。街はパニックが去ったあとの不思議に静かな雰囲気支配されてる。

ひと晩じゅう泣いて、由香はスラジツトが種になったことを受け入れた。だってあたしたちは種子化を研究する最前線にいる。種子化についていちばん詳しいのがあたしたち研究者だ。受け入れるしかないことはわかってるんだ。

「もしこれがおさまる時がきたら」と由香が言った。「スラジットを日本に連れてこようと思うの。わたしが見守つてあげなくちゃ」由香はベッドの横の裕一を見つめた。

今朝、由香は「もう大丈夫だから」つて言つて、自分の家に戻つた。本当は引き留めたかったけど、ひとりになりたい気持ちもわかつたから、由香がうちを出る時に「いつでも電話して」とだけ声をかけた。

「ラボにはちゃんと行くから」つて由香が答えた。

種子化。シュシカ。ちよつと発音しづらい。あたしはときどき「しゅしゅか」つて言つてしまつて、その時だけひとりでくすつと笑う。

一か月前、裕一が種になつた。こつちは、「しゅ」じゃなくて「たね」。どうしてひとつの字にいくつも読みかたがあるんだろう。

あの夜、あたしたちは夢中で愛し合つて、抱き合つて眠つたはずだった。朝になつて目が覚めたとき、あたしの隣には種になつた裕一がいた。

いつかその日がくるとわかってたんだ。毎晩、これが最後の夜かもしれないと思って眠りについていた。眠るのが怖くなかったわけじゃないけど、人間は眠らなくちゃ生きていけないから、怖いのは心の隅に押し込んで、薬を飲んで無理にでも寝る。それは覚悟じゃないんだ。あたしは、あたしと裕一はそこまで強くはなかったから。いちばん近い感情は諦めだと思う。だって、諦める以外にどうしようもないじゃない。

あたしは、裕一もとうとう種になっちゃったんだなって思った。起きて、クロゼットから大きなバスケットを出してきて、ベッドの横に置いた。

裕一は見た目から想像するよりもずっと重かった。持ち上げたらベッドがぐつしより濡れてたから、いったん裕一をベッドに戻して、洗面所からバスタオルを持ってきた。

裕一を抱えて丁寧にタオルで拭いて、バスケットに置いた。その横に腰をおろして、裕一だけたものを見つめた。

それから、あたしは泣いた。何時間泣いたかわからない。あたしは泣き続けた。あの日、あたしは一生分泣いたんじゃないかって思うくらい泣いた。

だけど、翌日もその翌日も、裕一を見るたびに涙があふれた。ほんとはわかってたんだ。人は一生分泣き切るなんてできない。涙はいくらでも作られるから。

裕一と出会った頃を思い出す。研究所が立ち上がってあたしが数理と情報のチームリーダーに決まって、まず最初にやったのがサブリーダーとして裕一を採用することだった。サクレーで研究員をしていた彼の業績はよく知ってたから、応募してきた時には迷うことなく彼に決めた。もう五年も前だよ。それからふたりで数理モデルとインフォマティクスを融合させた研究チームを作り上げてきた。あたしたちは数理の力で生命の原理を読み解きたかったし、そのために有望そうな若手研究者を世界中から集めた。

失踪事件のあとには決まって大きな種が残されてるってわかってても、人間が種になったなんて言い出すのはオカルトか新興宗教の人たちくらいで、普通の人たちはただ困惑してた。それはさうだよ。あまりにも常軌を逸してるもの。だから、あたしも裕一もこれに関わるようになるなんて思ってもいなかったんだ。

ところが、ほんとうに人間が種になつてゐるつていう疑う余地のない証拠が出た。種になる瞬間の映像だ。どんなに受け入れがたくても、事實は事實。それからだよ、研究者という研究者がそれまでの仕事を投げ出して、種子化と向き合つたのは。

あたしたちの研究所も研究を種子化に全面的にシフトさせた。目標は原因とメカニズムの解明、そして治療法とワクチンの開発につながる何か。その何かが具体的になんなのかは予想もできなかつたけど。

ワクチンつて言つてゐるのは感染症だと思われてた頃の名残り。はじめはみんな感染症を疑つたんだ。信じられないほど奇妙な現象だけど、それでも連続して起きてるからにはね。でも、感染パターンが全然わからなかつた。世界中でまるで自然発生みたいに種子化が起きてた。ていうか、自然発生としか考えられなかつた。

Dハイドロトリポイドが関係してゐるつてわかつたから、あとは受容体が特定されれば、もしかすると阻害剤を作れるかもしれない。そうなれば、種子化を抑えられる可能性がある。そう、可能性はある。

そして、治療法か。正直に書くと、あたしたち研究者は治療を諦めてる。種を調べれば、治療なんてできないのがわかる。だって、種になっちゃったんだもの、人間に戻せるとはとも思えない。でも、治療法がないなんて表立つては言えない。人びとからかすかな希望を奪うわけにはいかないから。

種子化は必ず睡眠中に起きる。初めて種子化の過程が映像に記録されたのはイギリスの病院だった。寝たきりの患者が種子化するところがたまたまビデオカメラにとらえられたんだ。その映像は次の日にはフォーラムに投稿されて、世界中の研究者が目にする事になった。

人間が種になる。みんながありえないって一蹴してたことが事実だって確認された。あたしたちはその映像を見て、ほんとにびっくりした。種が自分の身近にある今だって、この過程は信じられない。

頭のとっぺんから急速に硬化が進む。なんていうか、内側から殻が成長していくみたいに見える。映像ではパジャマが邪魔でよく見えなかったけど、からだが縮んでいくのはわかった。組織

が吸収されてるんだ。骨も溶けて吸収されてしまうんだろう。やがて、硬化したからだがパジャマを裂いて姿を現し、最終的に平べったい卵型をした種子全体が完成した。

種子化が完了するまで一時間もかからなかった。あたしたちはしばらく言葉を見つけれずじまつた。

「こう言っているのかわからないけど」まだ種じゃなかった裕一が口を開いた。「これはものすごくよく制御されたプロセスだね。偶発的に起きたんじゃない。全体がきちんと統制されてる」

「外的要因じゃなくて、内在するメカニズムがあるんだな」ジャンニが言った。彼ももういいい。

「表面ができるプロセスとからだを吸収されていくプロセスが協調してるんだね」とあたし。

「水分を放出しながら吸収されていくんだよ。吸収と放出」裕一はそれだけ言って言葉を切つた。

その日あたしたちはその映像を途中で何度も止めながら繰り返し見た。

フォーラムはしばらくこの映像の議論であふれた。あの現象に似てるとかこの現象に似てるとか、いろんな意見が出たけど、決め手はなかった。ただ、これが内在するメカニズムによるものだったという点ではみんなの意見が一致した。つまり、人間にはこの仕組みが初めから備わってたってこと。その意味はフォーラムでもずっと議論になってるけど、いまだにこれというものはない。

この映像は大ニュースとして世界に伝えられた。ネットのあらゆるところに映像のコピーが置かれて、世界中の人たちがこの現象を目にした。パニックはそこから始まったんだった。それからしばらくの大混乱については、もうあんまり記憶がはつきりしない。前後関係とか、よく覚えてない。ひどい事件も世界中で起きた。

種子化って呼ばれるようになったのもこの頃。たしかBBCが最初にseedizationって言葉を使ったんだったと思う。見た目が巨大な西瓜の種みたいだから。キャッチーな表現だったので、瞬く間に世界に広まった。

あたしたちは映像を何度も、それこそすみずみまで暗記するくらい見て、ヒントを探し続けた。

今朝、拓也が種になった。昼前に彼の恋人から電話があつた。自分に何かあつたらあたしに電話するように言つてたそうだ。彼女は何度も言葉を詰まらせながら話してくれた。あたしはただなぐさめるしかできなかった。

拓也はうちのチームでいちばん若くて、あたしのことをかたくなに「木崎さん」て呼び続けた。若いくせに二十世紀終わりのロックに妙に詳しかった。物静かで、でも時折一風変わったジョークを口にするのがおもしろかった。はにかむようなあの笑顔はもう見られない。

仲間を失うのはいつだってつらい。それが何日目でも。

はじめのうち、種子化するの男ばかりだった。男しか種にならないんじゃないかとも思われた。でも、男性の種子化が始まって半年くらい経って、女性の種子化が確認された。最初の報告

は台湾からだった。これは大きなニュースになったけど、二度目のパニックは長くは続かなかつた。みんなわかってしまったんだ。人は誰でも種になる。

あたしたちからすれば、恐れていた事態が起きたというのとはちよつと違つたな。むしろ、预期してたことだつた。だつて、男だけが種子化する理由は見つかつてなかつたんだもの。なんらかの原因でシグナルの発生が遅れてるだけじゃないかつて考えてた研究者は多かつた。

どうしてだつたのかはまだわかつてない。まだまだわからないことだらけだ。

培養細胞のデータは順調に集まつてる。所内で取られたデータはどんどん研究所のリポジトリに公開されて、フォーラムで世界に伝えられる。もちろん、同じようにあたしたちは世界中のデータにアクセスできる。それを世界中で手分けしてさばいていかなくちやならない。

見たことがない塩基配列のメッセージRNAが大量に作られてるのはすぐにわかつた。それも細胞の種類によつて違ふらしい。メッセージRNAがコードしてるタンパク質がどんな

機能を持つてるのかはわからないものばかりだけど、構造予測 AI にかけてみると、大半は決まった天然構造を持たないタイプのタンパク質みたいだ。

あたしは脱メチル化を疑ってる。メチル化で発現を止められてた遺伝子が脱メチル化で発現しはじめたんじゃないかな。

「その解釈はありそうだね」って昨日由香も同意してくれた。

「使われてなかった遺伝子が次々に動き出してるんだよ」あたしは言った。

大規模なデータセットから特徴を見つけ出すのは人間には無理。データの次元が高すぎるんだ。人間が目で見えてわかるのはせいぜい三次元止まりだから。

データから冗長性をできるだけ落としつつ、必要な情報を失わない最適な次元がある。それはいくつかの条件を指定すれば AI が見つけてくれるんだけど、その次元で表示させたデータを人間が理解できるかどうかは別問題だ。ブリストルのグループが、十五次元が最適でそれより下げられそうにないって夜中にポストしてた。つまり、それより低い次元ではデータが混じって構造が消えてしまうってこと。本当に十五だとすると相当に手ごわい。

午後、林田さんとのミーティングから戻ったら、萌絵とタンサニーがゴーグルをかけてデータに触ってた。空中で両手をひらひらさせてるのを見ると、ちょっと笑ってしまう。このカップルはこんな状況でもいつだって楽しそうだ。あたしはそれにすぐ救われてる。

あたしに気づいたタンサニーが「遙も見て」と言った。椅子に腰をおろしてゴーグルをかけ、タンサニーの視点に同期させると、データを示す膨大な数の色とりどりの光の点が目の前に夜空の星のように現れた。色は細胞組織の違いを表してる。

それから三時間くらい三人でデータを動かしながら議論を続けた。いろんなパラメーターを試したけど、やっぱりデータだけでは十五次元より下げるのは無理そうだった。うまい数理モデルが必要だ。

十一月にはいっても種子化の勢いは衰えるどころか、さらに急速に進んでる。男性の九割近くが種になったと思う。もう誰も数えてないからほんとうのことは分かんないけど、たぶんそんな

感じ。女性もたぶん三割くらい。街では自殺者も増え続けている。あたしのマンションでも、こどもが種になった母親が飛び降りた事件があったばかりだ。

うちの研究所にもう男の研究者はいないし、フォーラムに出てくる男性研究者もずいぶん少なくなつた。女性研究者も目に見えて減つてきている。それでも、みんなフォーラムに出てくる。研究所のメンバーも毎日研究を続けている。だって、他でもないあたしたちが研究しなくちゃならないんだもの。知りたいことが山ほどあるから。種子化の意味を理解しなくちゃならないから。

このまま人類は絶滅するしかないのかもしれない。もう研究しても間に合わないのかもしれない。でも、みんなそれを口には出さない。とにかくあたしたちは研究を続けるんだ。

林田さんのパートナーは早い時期に種になつた。林田さんが泣くのを見たのはあの日だけだ。

この文章が誰かの目に触れる日はくるんだろうか。触れたとして、その何ものかはこれを解読できるだろうか。万が一、万が一のその日のためにあたしは書いている。でも、もしかしたらあたしはあたし自身のために書いているのかもしれない。いつまでネットが使えるかもわからない。電

気が使えなくなる日だつてくるだろう。フォーラムに集められてる膨大な記録もネットがあつてこそだ。あとあとまで残るとすれば、ノートにペンで書いた記録なんだ。あたしはあたしの世界を未来に残そうとしてる。

ケラチンの異常増殖が種の表面を作るのはすぐにわかった。表面くらいなら削つてもいいだろうって、世界中で調べたんだ。でも、どうしてそれが起きるのか、そのメカニズムは今も明らかじゃない。iPS細胞から転換させた培養皮膚細胞でケラチンの異常増殖を再現できたグループはまだない。Dハイドロトリポイドだけじゃ足りないのかもしれないし、細胞同士の力学的な相互作用が重要なかもしれない。

種子化現象がまだ失踪事件と思われてた頃に、あとに残されてた種を解体した記録がいくつかある。種の中には白っぽい物質が詰まつてて、メスが入る程度の硬さだった。それが脱水した細胞の集まりだつてことくらいは電子顕微鏡観察でわかった。写真はフォーラムで見られる。

人間が種になつたつてわかつてしまうと、おいそれとは解体できないから、その代わりに詳しいCT像がたくさん撮られた。それを見ると、人間だった痕跡はもうどこにもなくて、組織らし

い組織はない。何にいちばん似てるかって言われたらやつぱり種だ。どれが胚にあたるとかは言えないけど、でも種つていうのがいちばんしつくりくる。種子化つて呼んだのはわりと正しかったと思う。

人間だった頃の意識や記憶はどこに行つてしまつたんだろうね。生きたあかしはどこかに残つてるのかな。楽しかったこととか悲しかったこととか。愛し合つたこととか。

裕一だったものを眺めて、あのどこかにあたしとの思い出がしまわれているのかもしれないと思う。でも、研究者のあたしは知つてるんだ。人間だった頃の記憶はあの中にはない。記憶を保てるような構造は何もない。

裕一が休眠のアイデアを話したのは、種のCTデータが次々に出てきた頃だった。会話は今もありありと思ひ出せる。あの夜、あたしたちは愛し合つて、それからふたりでふとんにくるまつて、裕一はあたしの裸の肩を抱いてた。

「あれがほんとうに種子だと仮定してみたらどうか」裕一が唐突に言った。うとうとしかけてたあたしはその言葉にはつと目をさました。

「植物のライフサイクルの中に種子があるじゃない」裕一が続けた。「あれは休眠状態なんだよ。活動を止めて、いつまでだってあの状態でいられる」

「見た目が種に似てるのは認めるけど」あたしは裕一を向いた。「植物の種って、個体そのものが変化してできるわけじゃないでしょう？」

「それはそうなんだけど」裕一もあたしの顔を見た。「種を飛ばして枯れちゃう植物もあるじゃない。あれは個体が種に変化すると言ってもいいと思う。でも、要点はそこじゃなくて、休眠状態だったこと」

「たしかにね。種のままですつと保存できるから、内部でダイナミクスは動いてない。力学系の安定固定点よね」

安定固定点っていうのはお椀の底みたいなもの、いったんそこに到達すると、お椀の縁を越えさせるような大きな変動を受けないかぎり、ずつとその状態にとどまるってことだ。

「だからさ」と裕一。「植物の種はライフサイクルに組み込まれてる。活動してる状態はリミットサイクルになってて、そこをぐるぐる回ってから、外部環境の大きな変化がトリガーになって安定固定点に飛ばされる。そしたら、大きな摂動がない限りもう動かない。それが種だよ。そして環境が戻ればまた元のリミットサイクルに飛ぶ。その繰り返し」

個体全体をひとつの力学系とみなしてしまうのは問題を単純化しすぎだつて、ふたりともよくわかつた。でも、そういう抽象的な議論が本質を理解する糸口になることはよくある。あたしたちは、生命が生きている状態をリミットサイクルに見立てて話した。リミットサイクルつていうのは安定した周期軌道のこと。生きてる状態は静止状態じゃなくて動き続けてるんだから、比喩としては固定点よりもリミットサイクルのほうがふさわしい。

植物が種になってそこからまた育つてつていうライフサイクルをリミットサイクルと固定点の繰り返しに見立てるのは、あたしたちにはわかりやすい。リミットサイクルも固定点も外部環境の小さな変動に対しては安定で、すごく大きな変動が起きてはじめて別の状態に移る。たとえば、季節の変化とか。

「環境が変わらなかつたら、いつまででも種のままでもいられる。大賀ハスみたいに」裕一が続けた。「固定点って、つまりは完全に眠ってるってことだよ」

「あるいは死んでるかね」あたしはまぜつかえた。

「分かってるくせに」裕一があたしの肩を強く引き寄せた。

「植物の場合はリミットサイクルから固定点に移る経路があるから種になるんでしょう？」とあ
たし。

「人間の遺伝子制御ネットワークにも実はその経路があるんじゃないかな」裕一が言った。

「動物なの？」

細胞の活動状態はタンパク質の種類と量が決める。どんなタンパク質を作るかは遺伝子に情報として書かれている。遺伝子からタンパク質を作り出すプロセスを活性化したり抑えたりする転写因子はそれ自身がタンパク質だから、やっぱり遺伝子から作られる。そうやって遺伝子同士がお互いにタンパク質の量を調節しあうすごく複雑なネットワークがどの細胞の中にもあって、細胞の活動状態を制御してる。

だいじなのは、どんな種類の細胞でも遺伝子制御ネットワークは同じってこと。このネットワークにはたくさん固定点やリミットサイクルがあつて、それぞれが違う種類の細胞に対応してる。幹細胞からさまざまな組織細胞に分化していくのは、適切なタイミングで適切な固定点やリミットサイクルに行くからだ。少なくとも細胞レベルではそうなってる。

「でも、そう仮定してみても」と裕一。「なんらかのトリガーでリミットサイクルから叩き出されて、休眠状態にはいる。それが種子」

「だって、そんなのおかしいよ」あたしは抵抗した。

「人間の遺伝子制御ネットワークの固定点やリミットサイクルを網羅的に調べた人なんていないし、そんなことはそもそも不可能だし」裕一はなおも言った。「だから、使われていない固定点なんていくらでもあるはずなんだ。そこには普通の経路では到達できない。でも、すごく特殊なトリガーでそういう固定点に飛ばされる可能性はあると思う」

「たしかに使われてない固定点はいくらでもあるはずね」あたしは認めた。「その中に休眠状態もあるのか」

細胞レベルと個体レベルをこつちやに話してるのはわかってる。でも、すべての細胞がいつせいに特別な固定点に行くとしたら？ そんなトリガーがあるとしたら？

つまり、毎晩眠ってるのはあれはほんとうの眠りじゃなくて、種子こそが人間のほんとうの意味での休眠状態じゃないかってこと。なにか特殊なシグナルがあつて、それがトリガーになつて活動状態から休眠状態への転移が引き起こされる。

「なにがシグナルだと思う？」とあたしは訊いた。

「それはこれから探さないと」裕一は言いながら、体を重ねてきた。あたしは彼の背中に手を回したけど、はじめはちよつとだけ上の空だったのをおぼえてる。

次の朝、休眠仮説をおそろおそろフォーラムに投稿してみた。反響は大きかった。文字通りの種子だつていう仮説は研究者の間に激論を巻き起こした。休眠仮説を考えていた研究者もあたしたちだけじゃなかった。短期間にもものすごい数のポストが飛び交つて、仮説の支持者は増えていった。

種子化の映像が撮られると、病院で意識不明の患者にありとあらゆる計測器をつないでひたすら待つという研究が世界中で行われた。何がきっかけで種子化するのか、まるで見当がつかなかったから、手あたりしだいにやるしかなかったんだ。

計測データはフォーラムで共有された。プレプリントサーバーじゃなくフォーラムが情報交換の最前線になったのはこのあたりからだ。みんな論文どころじゃなくなって、フォーラムにデータを投稿して、直接議論が行われた。それを解析するのがあたしたちインフォマティクスの役目。

休眠仮説がそれなりの支持を集めるようになった頃には、種子化直前の状態をとらえたデータも出はじめた。裕一が種になるずっと前だ。

あの朝も暑かった。ラボに着いたら由香が待ちかねたようにGoogleを掲げて見せた。あたしは席に着くとGoogleをつけて由香に同期した。表示されたのは三次元の座標軸で、そこに複雑な図形が描かれてた。

「これがシンガポールのデータ」由香が言った。「見ててね、LAのを重ねるから」

違う色の図形が現れたけど、ふたつはほとんど重なってた。それから由香はコペンハーゲンとリオデジャネイロのデータを重ねて見せてくれた。どれもみごとに一致してた。

「これはなに？」あたしは訊いた。

「種子化の一時間くらい前に観測された脳波のストレンジアトラクター。三次元に埋め込めるの。時系列を見てもただのノイズみたいだけど、実はカオスで、ノイズの背後に秩序が隠れてた。みんなおんなじでしょ。同じカオス。同じ秩序があるんだ」

「脳波か」あたしはゴーグルを外した。「スラジットと？」

「ゆうべ、ふたりで見つけたの。脳波だつていうのはかなり意外だよ。でも、これが種子化のシグナルだよ」

由香とスラジットは発見をフォーラムにポストした。発見つて、おうおうにして同時多発的に起きる。ほかにふたつのグループが脳波のカオスを報告してた。つまり、この発見は間違いな
いってこと。

もちろん、脳波が遺伝子発現を直接制御するはずはないけど、なにか特別な神経活動が種子化のきつかけになつてるのは確かだった。今なら、その神経活動が例のDハイドロトリポイドを分泌させてるってわかる。

人間だけが種子化するわけもこれで理解できた。この脳波は大脳新皮質の人間だけが持つ部分から出てたから。

あの夜、由香とスラジットが何を話しながらデータを眺めてたのか、ふたりの秘密は分からない。でも、たぶんそれは愛だ。愛を語り合うのが成功の秘訣に違いないよ。

あたしはひとりっ子で、両親を交通事故で亡くした。あたしがポスドクとしてドイツで研究してた時だったから、急いで日本に帰ってきて、お葬式を済ませたらまたドイツに戻った。

裕一はあたしにとつてたったひとりの家族だった。裕一との最初の一年は共同研究者として、それからの四年間は私生活でも一緒に生きた。

裕一とはじめてふたりきりになったのは、共著論文がScience誌に掲載決定になったお祝いに駅前のお寿司屋さんに行った日だった。珍しく饒舌になった裕一とお酒をたくさん飲んで、たくさん笑った。飲み足りなかつたあたしは裕一を自分のマンションに誘った。ソファに座って、冷蔵庫から出してきたワインを開けて、それから当然のようにキスをして、そのまま朝まで愛し合った。そうなることはもうずっと前からふたりともわかつてたんだ。

あたしたちはそれからすぐに一緒に暮らしはじめた。裕一と過ごした四年間にはたいせつな思い出が詰まってる。

あたしたちに残された時間は少ないのかもしれない。でも、できることをするしかないんだ。あたしは裕一とやってきた研究を続ける。

十二月は静かに訪れた。研究所に集まるメンバーは少しずつ、でも確実に減ってる。誰かがいなくなると、所内フォーラムで淡々と報告されて、それには決まって笑顔の写真がつけられる。種子化が始まる前、研究所は笑いに満ちてた。

自動化されてるインフラはメンテナンスが途絶えても何年かは動き続けるって言われてる。電気とか水道とか。このまま人間がいなくなってしまうても、インフラはしばらく活き続ける。街路の照明は夜になれば点いて、朝になれば消える。誰の役にも立たなくなったとしても。そして、何年かしたら、ひとつまたひとつと消えていくんだ。

電車はとづくに動いてない。移動は車か歩き。でも、車で遠くに行くのはなにかとリスクが大きい。あたしは車を持ってないから、自転車で動ける範囲しか行けない。

今朝、経済活動は終わりだって政府が宣言した。物流は集約されて、明日から食料品や生活必需品はスーパーマーケットやショッピングモールで配られる。こんな状況でも人びとはこの世界を少しでも長く生き延びさせるために働いてる。あたしたちも毎日研究を続けてる。だって、それがあたしたちの仕事だ。

田舎に住むのは事実上無理。政府は人々を都会に集めようとしてるけど、効果が上がってるかはわからない。動こうにも動けない人たちもたくさんいると思う。

医療は厳しい。支え続けてくれてる人たちはいる。でも、それだけじゃ人々を救いきれない。お医者さんが減った分だけ町の人たちも減ったけど、数合わせじゃすまないから。

世界から人が消えていく。

お昼のパンをかじりながらデータを眺めてたときにアラートが鳴った。タンサニーだった。今朝目を覚ましたら萌絵が種になってたつて、泣きはらした目で切れ切れに言った。あたしは咄嗟に言葉が出なかった。ただ、涙があふれてきた。ようやく「落ち着いたらおいで」とだけ伝えたけど、落ち着くつていつたいなんだろう。タンサニーはまた笑ってくれるだろうか。ふたりの結婚パーティーであたしが歌った歌を思い出して、また泣いてしまった。

あたしはここしばらく、Dハイドロトリポイドの受容体はひとつとは限らないんじゃないかっていう仮説を立ててデータをチェックし続けてた。今日、まるでかちつと音を立てるみたいにパズルのピースがはまった。

あたしはGoogleをはずして由香に声をかけた。「わかった。細胞ごとにレセプターが違うんだよ」

「え？」由香はきよとんとした顔をした。

「だから」とあたし。「細胞の種類ごとに別のレセプターを使ってるの。それだけじゃなくて、ひとつの細胞に十種類くらいのレセプターがある。それでデータのつじつまが合う」

「物質が同じなの？」

「仕組みはわからない。とにかく細胞の種類によってDハイドロトリポイドを受け取るレセプターが違うの。十種類くらいのレセプターが全部埋まってはじめて細胞状態が動く。データを見て」あたしはGoogleを持ち上げてみせた。

数秒後に由香が同期して、それからふたりで二時間くらい議論した。

あたしたちはレセプターの件をフォーラムにポストした。フォーラムに出てくる男性研究者はもういない。ひとりもだよ。女性もずいぶん減った。それでも、すぐにたくさんの反響が返って

きた。夕方にはあたしたちが見逃してた点を指摘するポストもあつて、曖昧だったところが少しはつきりした。

ひとつの謎が解決して、新しい謎が生まれたけど、ちよつとでも前に進めたのはよかつた。知識が増えるのはいいことなんだ。明日も誰かが新しい発見をするに違いないよ。あたしたちは前に進む。だって、進むしかないから。

「ジェインのポストは見た？」ロビーのソファに座つてコーヒーを飲んでたら、細胞生物学のチャンに声をかけられた。彼女も中国に戻れないまま、ここにとどまつてる。二度と故郷を見ることはないんだろう。ジェインはオーストラリアの研究者。あたしはまだ彼女のポストを見てなかつた。

「種子つて、植物が生きていける環境じゃない時期をやり過ぎたためのものではよ。冬とかさ」チャンが隣に腰をおろして続けた。「人間の種子化も環境変化をやり過ぎたためじゃないかつて、ジェインが言つてる」

「環境変化って」とあたし。

「わかってるでしょ。気候変動」チャンが答えた。

あたしはしばらく考えこんだ。気候変動が閾値を超えたら、それがきつかけになって人間が休眠状態に入る。休眠には目的があるっていう立場だ。あたしは目的論は好きじゃない。生物はただ繁殖しやすいものが生き残ってきただけで、因果はあっても目的はないと思いたい。

それでも、人間の種子化が突然始まったわけを説明してくれる仮説には惹かれるものがあった。

「ちょっと大胆すぎるかもしれないね」とあたしは言った。

「大胆だね。でも、ほんとうにそうなのかもしれないよ」とチャンが応じた。

あたしは釈然としないものを感じながら、コーヒーを口に運んだ。ガラスの向こうでは夕方の雨が降りはじめた。

昨日、林田さんから、種子化についてこれまでにわかっていることのまとめを話すように頼まれた。臨床や実験やデータ解析の結果をざっとさらって、プレゼンをまとめてみた。うん、あたしたち人類は種子化をずいぶん理解したと思う。わからないことはまだまだたくさんあるけど、それでも世界中の研究者が懸命に取り組んで解明は進んだ。

今日の午後三時にセミナールームにみんなが集まった。あたしを入れて十人。それで全員だ。あたしたちはたくさんの仲間を失ってしまった。

あたしは種子化の歴史を簡単に振り返ってから、今の時点で分かっている事実と推論を一時間ほど話した。種子化のプロセス、ケラチンの異常増殖、脳波のカオス、Dハイドロトリポイド、レセプター、脱メチル化、休眠仮説、幹細胞への再プログラミングを経由しない細胞の直接転換。そのすべてが指し示している可能性には触れずにおいた。

「希望的には」と締めくくりにあたしは言った。「あと一年もあれば根本的な予防法を発見できる可能性はあります。その程度には人類は種子化を理解したと思います」

質問は出なかった。

「ありがとう」と林田さんが言った。「種子化について、短期間にここまで明らかになったのは世界の科学コミュニティとそれに参加したわたしたちの努力の成果です。みんなほんとうにありがとう」

林田さんがそのあと何を言うか、みんなわかっていた。すすり泣く声が聞こえてきた。

「ありがとう」と林田さんはもう一度言った。「研究はこれでおしまいにしましょう。人類の滅亡を防ぐには、科学はまだ少しだけ力不足だったのだと思います。できれば研究所には顔を出してくださいね。クリスマスにはパーティをしましょう」

あたしも涙を抑えられなかった。

林田さんも三日前を最後に姿を見せてない。研究所に集まったあたしたちは毎日たくさん思い出話を話してる。チャンは中国に帰れなかったのを残念がってる。中国にいるお母さんからの連絡はとつくに途絶えてた。思い出話はしんみりしすぎるな。

帰りに食料を調達しにスーパーマーケットに寄ったんだ。そしたら、小型トラックから荷物をおろしてる女の人がいたから、びつくりして声をかけた。あたしより十歳くらい歳上だと思う。食料が必要な人たちがいるから運んでるんだって、その人は笑ってた。センターにはまだ備蓄がたぐさんあるって。保存食ばかりだけどねって、その人はまた笑った。

昨日のことを書かなくちゃならない。昨日はそれどころじゃなかったから。

午後になっても由香はラボに姿を見せなかった。電話してみたけど、応答はなかった。あたしは不安でいっぱいになった。不安っていうより確信だ。

フォーラムに出てくる数少ない研究者も、もうみんな店じまいの態勢なのがわかる。気候変動がトリガーだと言ったジェインからのポストもとづくに途絶えてる。いったい世界中にどれだけの間が残ってるんだろう。

裕一が種になったあと、あたしと由香は何かあった時のためにお互いの部屋の鍵を預かってた。だから、あたしは研究所を出て、自転車で五分ほどの由香の部屋に向かった。

ベッドに由香だったものがいたよ。あたしは由香だったものを抱きしめて泣いた。自分でもびつくりするくらい泣いた。裕一が種になったときと同じくらい泣いた。

しばらく由香の部屋にいて、それから由香を抱いてあたしの、あたしと裕一の部屋に戻った。

由香は裕一よりちよつと小さかった。同じバスケットに並べて入れた。ごめんね、スラジットと一緒になくて。

お茶を飲みながら由香にジェインの仮説を話したときを思い出す。由香は椅子から立ち上がって、「そんなのおかしい」って叫んだんだった。

「でも、なんのために休眠するのか考えたら、あながち間違いともいえない気もするよ」とあたしは言った。

「そうじゃなくて」由香がまた叫んだ。それから、腰をおろして今度は穏やかな声で「そうじゃなくて」と繰り返し返した。

「わたしはジェインが正しいと思う」由香が続けた。「種子化は環境変化を休眠状態で乗り切るために人間が備えてる仕組みなんだ。きつとその通りなんだ。気候変動がトリガーになって、人々は次々に種になった。休眠のシステムが正しく働いたんだよ」

「あなたもそう考えるのね。だとしたら、何がおかしいの？」

「だって、ありえないじゃない」由香が言った。「人類が生まれてから、この仕組みは一度も使われなかった。しかも、人間しか持つてない仕組みなんだよ。そんなものが進化するはずがないじゃない」由香は両手で顔を覆った。「ありえないよ……」泣きそうな声でつぶやいた。

ああ、とあたしは思った。あたしが抱えてきた違和感の正体はそれだ。人類が地上に現れてから百万年以上経った今になって初めて発動するようなシステムが進化で生まれるはずはない。進化はそんな仕掛けをあらかじめ用意したりしない。絶対にありえない。すべては仕組まれたものなんだ。すべては大昔に何ものかの手で巧妙に仕組まれたんだ。人間じゃない何ものかの手で。

はろーはろー、これを読んでもあなた。あなたたちがあたしたちの遺伝子にこれを仕組んだのですか。あたしには知りたいことがたくさんあるんだ。あなたは誰でどこから来たのかとか、どうして人間を選んだのかとか。でもね、いちばん知りたいのはこれ。あたしたちの種から、いったい何が生まれるの？

人間じゃないと思うの。だって、もう人間を再構成できるとは思えないもの。次のトリガーが働いたら、今度は今までは別のリミットサイクルに行くんじゃないかな。そこから細胞が分化して、何かになるはずだよ。種だから植物になるのかな。あたしたちが森になって、地球を覆うんだろうか。それならそれで美しいよ。それもいいな。

はろーはろー、あたしはまだここにいます。ここがあたしの帰る場所だから。裕一と由香がいるから。

あたしの言葉は届いてるかな。あたしはあした目覚めるかもしれないし、目覚めないかもしれない。今夜このまま種になって眠り続けるかもしれない。種になるまでこれを書き続けるよ。あ

たしは人類が、つていうかあたしたちが生きた記録を書き残してる。あたしたちが今まで懸命に生きてきた記録。あなたが読んでくれていると信じてる。

怖くはないよ。怖くはないんだ。裕一と由香がいるから。

おやすみなさい、あたしの世界。またあした。

はろーはろー、あたしはまだ人間だ。今朝も裕一と由香におはようを言った。それから、いい天気だったから洗濯をしたよ。

午後近所の公園に行ったら、高校生の子がブランコをこいでたんだ。もう何日も前にお母さんが種になったって言うから、うちにおいでって誘った。家族が増えたよ。美知子っていうんだ。あたしの新しい妹だ。今はベッドで小さな寝息を立ててる。ひとりで何日も生きてきたんだね。

あしたはクリスマスイブだよ。おやすみなさい、あたしの世界。またあした。

はろーはろー、今朝もちゃんと目が覚めた。

昼過ぎに美知子とスーパーマーケットに行つて、クリスマスのごちそうをもらつてきたよ。ていつても、特別なものはないけどね。マーケットにはもう新しい品物が入荷してないと思う。

美知子とクリスマスパーティーをしたんだ。あたしのお気に入りのネットレスをプレゼントして、首にかけてあげた。美知子はマーケットから持ってきた小さな人形をくれたよ。お菓子のキャラクターだつて。「これしかなくて」つて言つてたけど、妹がいてくれればそれでいいんだ。

美知子が好きな歌を何曲もスマートフォンで聴かせてくれたよ。そういえば、新しい音楽なんか全然聴いてなかったな。あしたは歌を教えてもらおう。

おやすみなさい、あたしの世界。またあした。

はろーはろー、今朝起きたら美知子が種になつてた。せつかく家族になつたばかりなのに残念だな。美知子ともつとたくさん話したかつたよ。もつと思ひ出を作りたかつた。

バスケットをもうひとつ出してきて美知子を入れて、裕一と由香のバスケットと並べて置いた。涙は出なかった。あたしはもう泣かないんだ。あたしはもう誰のためにも泣かない。

おやすみなさい、あたしの世界。またあした。